

[調査報告] 中国ハンセン病回復者村を訪問して

金 貴粉

現在、中国にはハンセン病回復者の村が約600あるといわれている⁽¹⁾。その中で、2014年度特別企画展開催にあたり、林志明さんの作品借用のために伺った中国・広東省で林さん以外の回復者の方々にもお会いする機会を得た。訪問した回復者村と回復者の様子をここで紹介したい⁽²⁾。

【南海紅衛医院】（広東省佛山市）

南海紅衛医院は、広州市内から約1時間の距離にあるハンセン病回復者が暮らす村である。この回復者村は、現在、広東省佛山市南海区によって運営がなされており、入所者数は約60人である。病院施設が併設されており、毎日、医師が通いで常駐しているとのことであった。広東省の回復者村は他の省に比べると医療設備や居住環境等において、省や区単位で行政からの支援があり、中国国内において最高レベルにあるということであった。



入所者の暮らす居住棟

その後、村長にご挨拶をし、施設内を簡単に見学させていただいた。これまでも回復者支援団体のJIAで活動している学生キャンパーが出入りしていることもあり、皆さん温かく迎えてくださっ

た。入所者の多くは子どもがいないということもあり、若い学生の来訪をいつも心待ちにしているとのことであった。中には、部屋の壁一面に学生たちと撮影した写真を飾っている入所者もいた。

施設内には食堂もあるが、林志明さんのように自炊している方もいるとのことであった。林さんは食事作りと近隣の散歩を日課にしている。



林志明さん

その後、林さんの案内で他の入所者の方を訪問した。どの方もお高齢であったが、絵を描く方、音楽を奏でる方など、林さんの他にも文化活動を行っている方がおり、話を聞くことができた。以前は、発表の場が村内でもあったが、現在は全体的に高齢化しており、発表する場もなく、気持ちが沈むことも多いという。医療面でも要介護になった場合、介護してくれる職員がいないので、その点も不安であると言われていた。高齢化が進み、回復者の精神面でのケアの必要性は日本の状況とも重なりと感じた。

(1) 中国では1950年代後半からハンセン病患者を隔離する村が中国全土約800ヶ所につくられた。本稿ではこれらの村を「ハンセン病回復者村」と記し、各施設名については現在の名称で記すこととする。

(2) 回復者村に住む入所者数などの数値は筆者が訪問した2013年11月と2014年7月時点のものである。



楽器を演奏する孔豪彬さん

林さんは絵画作品だけではなく、これまで自身の半生を綴った書物や歴史書なども世に送り出してきた。どうしてここまで作品を作り続けるのかということをつづねると、「自分の生きた痕跡を残すため」という答えが返ってきた。日本のハンセン病療養所に入所する回復者にも重なる想いを林さんにも見た気がした。

林さん自身、この村の歴史をまとめた文章を作成していたが、このように歴史を紡ぐ人がいなければ消えてしまうことを考えると、回復者の歩んだ道のりについて早急に書き記していく必要性を強く感じた。



木陰で歓談する入所者たち

【沙梨院】（広東省仏山市）

沙梨院は広州市内から片道約3時間の広東省仏山市三水区にある。ここでは林さんとは別の作品制作を行っている馮達財さんという方にお会いした。沙梨院は入所者数12人という小さな回復者村で、病院施設も併設されてはいなかった。この施設は三水区が運営し、入所者は月500元（約9500円 ※2013年11月現在）を生活費として支給され

ているという。食事は入所者自身が作っているようだが、全員個室で台所と浴室が併設しているということなので、快適であるように感じた。



沙梨院内の様子

この村の入所者も高齢化しており、その多くが80歳以上であった。12名という少人数の施設であるためか、全員が部屋から出て、歓迎してくださった。その中で今年77歳になったという馮達財さんは、赤い紙を取り出して、揮毫してくださった。中国では毎年、旧正月に合わせて部屋の入口に赤い紙に書を書いて貼るという風習があり、村を訪れる学生と一緒に書いているのだという。同じ仏山市内でも、その下の区ごとに回復者への公的支援が異なっており、林さんの住む施設との規模の違いに驚いた。入所者数も少ないためか、療養所というよりは、一つの村という様相を呈していると感じた。



揮毫する馮達財さん

【番禺新沙医院】（広東省広州市）

番禺新沙医院は、広州市内から片道約3時間の場所に位置する。この村の入所者数は27人で、広東省広州市南沙区が運営している。対岸から舟に乗り、到着して目に入ってきたのは病院施設であった。この病院は一般病院として外来患者も多く訪れるという。実際に私たちが向かう際も、若い一般の人々が同船していた。



新沙医院の病院施設

回復者の居住地区は病院から歩いて3分ほどの場所にあった。2階建ての入所者居住棟を中心に開放的で明るい雰囲気であった。私たちが到着してすぐに村の広報を担っている郭祥水さんと絵画作品を数多く制作している張應全さんが迎えてくださった。到着時間が昼食前ということもあり、用意してくださったアヒルの煮物を囲んで、村についてのお話を伺った。



回復者村内の様子

入所者は80代以上の方が多いが、食事を作ることは各自で行っているという。この施設は1部屋3人ずつで生活していた。郭さんはお元気そうであったが、年齢は90歳であるという。100歳近い

方もいらっしゃったが、その方も背中には曲がっていても、自分でできることについては自分で行っているようで、重そうなバケツを懸命に運んでいた。この施設では毎月南沙区より月700元ずつ生活費が支給されているという。やはり、管轄する区によって支給額に差があることがわかった。



村の広報担当・郭祥水さん

その後、張應全さんのアトリエ兼住居を案内していただいた。学生だけではなく、近年、台湾の宗教関係者や企業からも来訪者があり、彼らに喜んでもらうためにも好きな作品を制作し続けているという。多い時は一日20枚ほど描くという作品は、動物や風景、風刺画など多岐にわたっており、独自の世界観が窺えた。張さんは現在62歳で、村の中では若い方である。7歳頃に発病した後、一般社会で働き、結婚したが、体調を崩して再び村で暮らすことになったと語っていた。主に手先に後遺症が見られ、不自由そうではあったが、絵筆をしっかりと握み、躊躇なく絵筆を進めている姿が印象的であった。日本のハンセン病資料館についての紹介と図録をお見せしたところ、日本の回復者による作品に驚き、交流をもちたいとおっしゃっていた。



自身の絵を見せる張應全さん

最後に張さんは当館に自身の作品15点を寄贈してくださいました。今後、機会があれば、林さんだけではなく、張さんや他の方の作品も紹介していければと思った。

この日、同行していた広東省華南師範大学教授の韓益民先生によると、現在、他の回復者村においても資料保存をしなければならないという動きが出ているという。どのように資料を収集し、保管していけばよいか、また建物も含めて歴史を継承していく方法について模索中であると話されていた。情報提供など、当館への協力要請もあったので、今後、中国の回復者の歴史をどのように残していくのかという点についても、日本との共通点をふまえ、考えていきたいと思った。

【東莞泗安医院】（広東省東莞市）

東莞泗安医院は広州市内から片道2時間の場所に位置する数少ない広東省立の療養所として、1962年に設立された。多い時には1000人以上の入所者がいたが、現在は79人だという。79歳になる入所者の彭海堤さんは、30度を超す猛暑の中、かつて使われていた食堂や演劇、映画を上映していたホール跡、食糧貯蔵庫、図書室などを説明してくださいました。以前は舟でしか陸地と往来できなかったが、現在は沼地が埋め立てられ、道が整備されたため車で往来できるようになったという。

その後、彭さんのお部屋を案内していただいた。彭さんは絵をよく描く。作品を描くことは、自身を表現することであり、心の安寧になることであると語っていた。描かれた作品はどれも繊細な筆遣いで描かれ、画面に描かれた人の内面

までも写し出されているようであった。壁には他の療養所入所者による作品も飾られていたので、回復者同士の交流があることがわかった。

引き続き療養所内を歩いていると、入所者が食事の支度をしているので、自身で作っているのか尋ねたところ、自分でつくっている人が多いという答えが返ってきた。食事を作れない人は作ることでできる食事係の入所者に頼み、作ってもらっていた。また、その他身の回りのことでできないことがあると、住み込みのボランティアに頼むのだと言っていた。この回復者村には、医療施設はあっても介護員のような職員はいないということで、キリスト教の信仰者の方が15人ほどボランティアで働いていた。



かつての食堂を案内する彭海堤さん

その後、黄少寛さん（88歳）という女性の方と出会い、お部屋でお話を伺った。とても朗らかな方で、最近『美女婆婆在泗安』（美人のおばあさん泗安にいる）という本を出版したのだという。黄さんの写真を長年とり続けているカメラマンの黄焱紅さんと、2年以上、療養所とともに暮らしている謝翠屏さんという若い女性の方との共著で、黄さんの日常や旅に出かけた時の様子、普段暮らしている療養所で共に暮らす人々の素顔を写し出した本であった。また療養所の歴史も書かれていて、療養所の歩みを知る上で貴重な本であると感じた。



黄少寬さん

入所者たちの表情は全体的に明るく、あまり暗さを感じなかったが、高齢化し、家族とのつながりも絶たれている入所者が多いというのは、日本の状況と重なると感じた。学生キャンパーを始め、一般の人が園に出入りしている印象を受けたが、新患者は広東省ではほとんどいないので、療養所の将来構想を考えなければならない状況なのだという。実際、周りの小さな回復者村から、この村への移住をしている人もおり、今後、ますます増えることが予想される。引き続き東莞泗安医院についても注視していきたいと思った。

【入所者を支える活動組織 広東省漢達康福協会 (HANDA)・NPO法人「家-JIA-」について】⁽³⁾

HANDAは中国ハンセン病センターを引退したDr.ヤンによって創設された。彼はハンセン病の問題について、病気自体は解決に向かったが、残された課題として回復者への差別や障がい、貧困があるとし、回復者の社会復帰と彼らを受け入れる社会作りを目的として、1994年にハンセンの「ハン」とダミアン神父の「ダ」から、「ハンダ」という組織を創設した。こうした理念に賛同した回復者たちが自らの手で権利を獲得するため、Dr.ヤンを中心に、経済的な自立、村人同士の交流の場をまずつくることにしたという。当時、患者・回復者は中国国民に与えられているIDカードすら持っていなかったため、その取得から活動は始まった。1996年には正式に広州市のNPO団

体に登録され、活動内容も授産施設を作り、ミシンや農業の技術を教える活動や一般の人への社会啓発活動を行うようになっていった。その後、回復者の中から義足技師も誕生した。

現在はそれらの活動に加え、回復者同士の医療互助活動や学校に通うための奨学金制度も新たに作り、活動の幅を広げている。2013年11月現在の職員数は24人である。



秘書長のDr. マイケルとHANDA事務所

NPO法人「家-JIA-」は、2004年、広州において設立した学生ボランティアを中心とする中国ハンセン病回復者の支援団体である。これまで日本・中国を中心に1万人以上の学生が参加し、中国華南5省（広東省、江西省、湖南省、湖北省、海南省）のハンセン病回復者村や山間の小中学校においてワークキャンプを行ってきた。

元々、この活動は、2003年に広東省潮州市にある回復者村に住み込み、活動をしていた原田燎太郎さんによって始まった。活動の拡大に伴い設立されたのが「JIA」である。設立当初は、ハンセン病に対する無知と偏見から中国人学生の参加は少なかったが、日本人学生の活動を見て、その数が徐々に増えていったという。今では、約2000人の中国人学生が各地区に地区委員会を作り、受け持つ地区の複数の村でワークキャンプを行っている。

そうした活動はやがてメディアでも取り上げられ、回復者の実状を広く伝えるだけでなく、支援の輪も広がることとなった。この活動の意義は、学生たちも回復者と関わる中で自分自身を見

(3) HANDA、JIAの詳細については、『林志明作品展—中国ハンセン病回復者の書画活動—』（国立ハンセン病資料館、2014年）を参照のこと。

つめ、社会をよく知ろうとするようになったことにあるという。



JIAの事務所で働くスタッフたち

ハンセン病回復者が若い学生との交流を通じて、徐々に社会とつながろうとしている姿を見て、こうした交流の大切さを感じた。国は異なっても相互理解をしていくための彼らの活動には学ぶところが大きいと思った。

今回は、林さんの作品を借用し、その詳細について調査を行うことが第一の目的であったが、他の回復者の方にお会いする機会や支援団体の活動についても調査することができた。

中国では、1950年代後半から1960年代初頭にかけて、ハンセン病患者を隔離する村が中国全土に約800ヶ所作られた。化学療法が確立した後も町から離れた場所に回復者村が作られたため、家族とも引き離された人が多かった。またインフラが整っていないため、住環境も決して良いとはいえなかった。

私がこの度訪問した広東省の回復者村は、どの村も、医療設備、住環境、生活費の支給等において良いと感じた。そして、各村では自分自身の人生をより良いものにしようと努力する人々の姿を多く見た。しかし、彼ら、彼女らの隣にはボランティアや医療従事者の姿はあっても家族の姿を見ることはなかった。今、改めて広東省漢達康福協会（HANDA）やNPO法人「家－JIA－」の活動の重要性を感じるとともに、中国社会におけるハンセン病回復者への差別・偏見を解消するためにより広範な啓発活動の必要性を強く感じた。

啓発活動の重要性は日本においても同様のことがいえる。中国や日本の回復者の置かれた状況を

考えることから、それぞれの社会がより住みよい場所になるように変えていく必要があろう。今後も中国の回復者村に住む人々について、考えていきたい。

本調査および本稿の執筆にあたり、中国回復者村の皆様、HANDAの皆様、JIAの皆様並びに原田療太郎氏にご協力、ご助言いただきました。ここに記して、厚く感謝申し上げます。